



評価項目	重点目標	取組の内容		中間評価		◎学校関係者評価	評価	期末評価	
		・具体的な方策（取組）	★評価の観点（指標等）	○成果と▽課題	●▼期末への方策等			○成果と▽課題	●▼次年度への方策等
確かな学力の向上	◇「教えるから学ぶへ」をスローガンとし、全校で生徒が主体的に学ぶ授業への根本的転換を行い、自律的に学ぶ生徒の育成を図る。	○単元内自由進度学習への転換を目指し、各教科で取り組む。 ○協働的な学びと個別最適な学びができるよう、授業改善を行う。	★生徒の意識調査において、「自分から主体的に学ぶ」という項目の、肯定的割合を90%にする。（昨年度82.5%）	○肯定的割合は、86.4%であった。 ▽全教科で単元内自由進度学習への転換に取り組む。	●ガイダンス→探究→まとめ・振り返りの流れを各教科で統一する。 ▼10月までには各教科で少なくとも1回は単元内自由進度学習に取り組む。	□3年の国語の授業でグループでの活発な意見・討論・代表者の発表がとても生き生きしていた。 □毎日の授業に真剣に取り組む、自ら進んで学ぶ生徒の数が1クラスあたり半数以上であることが素晴らしい。	A	○肯定的割合は、85.7%。 ▽2年生の否定的回答が30%程度あり、この層を来年度3学年に向けて、向上させることが課題。	●引き続き、ガイダンス→探究→まとめ・振り返りの流れを授業の型として徹底する。 ▼意欲向上のため、授業ごとに分かった、できた体験を増やせるように授業の改善をする。
豊かな心の育成	◇「リスペクト」の視点に立ち、人と接することのできる生徒を育成する。	○「考え、議論する道徳」授業を行い、さまざまな課題を話し合ったり、考えたりしながら解決を目指す生徒を育成する。 ○生徒には敬称をつけて呼ぶよう徹底する。	★生徒の意識調査において、「相手の人格を大切に、互いを認め、尊重して行動できる」という項目の「あてはまる」という回答の割合を向上させる。（昨年度49.6%）	○「あてはまる」は68.6%と大幅に向上した。 ▽大人も含む周囲に対する暴言が多く、改善が進まない。	●すべての教育活動においてリスペクトを徹底する ▼暴言に対する生徒発の取組を促し、実行させる。「人をばかにしたり、差別したりする暴言や行動はしないようにしている」という項目の「あてはまる」(67.9%)を向上させる。	□地域協働の委員がコスミックセンターの体育館まで全校生徒を路地にたち、生徒の行き帰りの誘導をした。生徒からお礼の言葉や感謝をもらった。 □一貫して「リスペクト」の言葉を使うことにより生徒の心の育成を意識されていると感じる。 □自ら挨拶しようとしている生徒が6割以上であることが、素晴らしい。	A	○「あてはまる」は63.2%。 全体的に暴言が減り、意識の向上が見られた。 ▽一部の生徒の暴言が見られるため、意識を向上させる必要がある。	●生徒への敬称を継続する。すべての教育活動においてリスペクトを徹底する。 ▼暴言に対する意識を向上させるために生徒の取り組みを継続させる。当該項目の「あてはまる」80%以上を目指す。
体力の向上	◇体力向上への課題を意識し、その解決のために取り組もうとする姿勢を育成する。	○男女共修の取り組みを通して、生涯にわたってスポーツを楽しむことのできる姿勢を育む。 ○生徒主体でスポーツを楽しむ機会を創設する。	★生徒の意識調査において、「体力向上のために何か取り組んでいる」という項目で、肯定的回答の割合を向上させる。（昨年度66.4%）	○肯定的割合は77.2%であった。 ▽水泳指導などの補習が必要な状況である。	●生徒が主体的に楽しんで運営する運動会を実施することができた。 ▼補習を適宜行う。生徒会主催による体力向上の取組を行う。	□運動場での活動を見ることができなかった。 □バスケの授業で疑問に思えるところがあり先生に伺ったところ、ルールを考えて、男女がともに学べる試合の仕組みだと言ったことだった。 □朝ご飯を欠かさず食べている生徒が7割以上いて基本ができています。また、体力の向上も5割以上の生徒ができています。	A	○肯定的回答は76.0%であった。生徒会の取組で、体を動かすことができた。 ▽スポーツが苦手でも体を動かすことへの意識を向上させる。	●2年ぶりの校庭での運動会を目標に、生徒主体の運動行事となるよう指導をする。 ▼得意不得意に左右されずに取り組める、生徒主体の行事を創設する。
創意工夫ある教育	◇生徒主体の学校行事を行い、「やりとげる」生徒を育成する。	○「主体的に楽しむ生徒の姿」を理想とし、主体性に基づく楽しさを味わわせるよう計画する。 ○生徒が主体的に関わるよう、生徒の意見を取り入れることを優先する。	★生徒の意識調査において、「学校行事に主体的に参加し、協力して活動できた」という項目で、肯定的回答の割合を維持する。（昨年度86.2%）	○肯定的割合は88.6%であった。運動会をはじめとし、生徒が主体的に楽しんで運営することができた。 ▽2学期の行事でも生徒の主体性を活かすことが大切である。	●学芸発表会において、生徒が主体的に楽しめるような運営を行う。 ▼学年行事においても、生徒の意見を取り入れることができるようにする。	□生徒主体の学芸発表会は、会場が盛り上がり一つになりました。先生が生徒と一緒に素晴らしいと思いました。 □学芸発表会では、学年毎に経験と学びが表現され楽しませていただいた。ステージと会場の生徒のやり取りが感動的でした。 □発表会や行事を参観して参観して生徒の活動がのびのびしているように感じた。 □学校行事に積極的に参加し楽しんで取り組んでいる生徒が65%以上いるが、これは、創意工夫の表れである。	A	○肯定的回答は91.0%であった。学芸発表会も生徒主体の発表の場となった。 ▽「最後までやりとげる」の肯定的回答も89.4%と高く、この2点を維持することが課題である。	●生徒が主体的に楽しむ姿を理想とし、すべての学校行事を運営することを目標とする。 ▼小規模校の強みを生かし、生徒一人一人に役割をもたせ、責任感を育む指導を行う。
地域連携	◇地域協働学校として、地域と連携した教育活動を充実させる。	○地域防災への取組として、地域避難所運営訓練を1年生主体で取り組む。 ○学校だよりを毎月発行する。生徒の活動などを報告するブログは、平日毎日更新する。	★地域協働学校運営協議会をアンケートや紙面なども含めて8回以上実施し、地域の方の意見を聴く機会を設定する。	○「地域の方と一緒に活動してみたい」という項目では、72.1%の肯定的回答があった。 ▽地域避難所運営訓練の計画と実施が課題である。	●避難所運営訓練等で1年生が主体となる取組を行う。 ▼地域のイベントで生徒が参加できるコーナーを用意していただき、地域に参加する楽しさを味わわせる。	□地域連携として、落ち葉掃きや地域清掃で生徒と協力してできた。 □避難所訓練は、自主的に行動したり質問をしたりと活発な場面を多く見かけました。受付から案内役の係の生徒の言葉遣いも良かった。 □もう少し地域協働学校の一員として、イベントを行いそれに参加する。そうすることで学校に楽しさを増やしたいと思った。清掃行事は良かった。 □機器の使用が、通常の風景となり、使い方は楽に使用していますが、今後どのように使うのが課題。 □生徒が地域の人から様々なことを学び一緒に活動したいと考える生徒が80%以上である。	A	○肯定的回答は81.9%であった。避難所運営訓練に1年生全体が参加できた。吹奏楽部が地域のイベントに参加した。 ▽ブログの更新が滞り、学校情報発信は満足いくものではなかった。	●避難所運営訓練への1年生参加を継続する。地域のイベントに学校紹介の形で参加する。 ▼学校情報の発信を定期的に行えるようにする。

ICTの効果的活用	◇校内における組織的なICTの有効活用を進める。	○ドリルパークやオクリンクを活用し、個別最適な学びを推進する。 ○アンケートや申し込み・参加確認などにICTを活用し、校務を整理する。	★生徒の意識調査において、「タブレットを用いて、個人学習をしている。」という項目で、肯定的回答の割合を90%以上にする。(昨年度81.7%)	○肯定的回答は78.6%であった。タブレットでの学習が日常的なものになっている。 ▽タブレットで個別最適学習を推進していくことが課題である。	●タブレットを用いたドリルパークでの学習を推進する。演習や補習などでは、基本的にタブレットを使うようにする。 ▼ICTを活用した校務整理を行っていく。	□機器の使用が、通常の風景となり、使い方は楽に使用していますが、今後どのように使うかが課題。 □積極的活用をする生徒は、全体の80%以上である。	○肯定的回答は82.7%であり、タブレットPCを用いた学習は定着している。アンケートはすべてICTを利用できた。 ▽参加申し込み等にICTを活用し、校務の整理を推進することが課題だ。	●ドリルパークなどの個別学習推進とともに、日常の検索や翻訳などにも有効的に活用できる仕組みを整える。 ▼保護者の確認や申し込み等について、基本的にデジタルで行うことを基本としていく。
いじめ対策	◇いじめ防止に向けて組織として対応する。	○ふれあい月間のアンケートやふれあい面談、Hyper-QUの分析結果、SCアンケートを全教職員で共有し、配慮を要する生徒について理解をもつ。 ○いじめに対して組織として対応する。	★生徒の意識調査において、「先生を信頼し、いじめ等の問題がある時は、すぐに先生に相談している」という項目で、「あてはまる」の割合を向上させる。(昨年度51.1%)	○「あてはまる」は53.6%であった。肯定的回答は85.7%であった。ふれあい面談やSCアンケートは生徒理解に大変有効であった。 ▽被害生徒にも加害生徒にも寄り添う指導が課題である。	●ふれあい面談・SCアンケート活用による教育相談を今後も推進し、生徒が相談しやすい下地をつくっていく。 ▼Hyper-QUの分析を推進し、満足度の高いクラスの取組等を参考にしながら、一人も取り残さない学級運営を目指す。	□事案発生後学校はすぐに対応できた。 □いじめの把握をいろいろな方法で推進し共有、声かけが大切だと思います。 □いろいろなタイプの不登校生が登校しても、学校の中に居場所が設けられている。 □いじめが発生したとき先生に相談ができることと答え生徒が80%を超えと言うことは、学校が生徒から信頼されている証拠である。	○「あてはまる」は56.4%、肯定的回答は84.2%であった。 ▽迅速な問題解決だけにこだわらず、きめ細かく事情を聴き、随時保護者に知らせる対応をとること。	●ふれあい面談・SCアンケートの活用による教育相談の推進。担任の丁寧な言葉がけの徹底。 ▼Hyper-QUの分析を推進し、満足度の高いクラス運営の手法を共有化し、一人でも多く自己肯定感を高められるクラスづくりを推進する。
評価と改善	◇学校評価、授業評価を活用した改善を推進する。	○学校評価を2回実施し、その結果を検証し授業改善を進める。 ○教員の意識調査アンケートを行い、組織的に学校運営に携わっているか確認する。	★生徒の意識調査において、「先生の授業はわかりやすい」という項目で、肯定的割合を向上させる。(昨年度86.9%)	○肯定的回答は90.0%となっている。 ▽より分かりやすくなるよう、授業改善を進めることが課題である。	●生徒が主体的に学ぶ授業をする上で、何を学ぶのかというガイダンスを分かりやすくする。 ▼2回目の教員の意識調査もを行い、学校経営方針をもとに教育活動を行っているか確認する。	□2回の評価で比較すると、明らかに向上している。 □何事も顧みることが大切です。 □「リスペクト」の精神で相手の人格を大切にし、お互いを認め合っていると9割の生徒が考えている。これは学校が評価を適正に行っているからだと思える。	○肯定的回答は89.4%であった。 ▽教員の自己評価を高める工夫が必要である。	●授業改善をテーマにした校内研修を増やし、お互いの手法を共有していく。 ▼教員の研修参加を奨励し、学んだことを共有させる。
特別支援教育の充実	◇特別支援教育への理解を深め、生徒一人一人の発達に寄り添った支援を、組織的に行う。	○特別支援教育委員会による、個別の支援についての検討を充実させる。 ○生徒一人一人に身に付けさせる自立活動と、そのための教育実践を整理し、組織で共有・改善を行う。	★生徒の意識調査において、「先生の指示や、教室の掲示はわかりやすい」という項目で、肯定的評価を80%以上にする。	○肯定的評価は95.7%であった。 ▽評価は高いが、組織的にユニバーサル化を目指すことが課題である。	●校内委員会においては、一人一人への支援検討を充実させる。学級での支援についてまだ工夫できるところがあるので、委員会で検討する。 ▼特別支援的な視点を通常教室にも導入し、誰もが分かりやすい掲示を目指す。	□先生のあたたかい支援で一人一人の生徒が成長できている。 □学びは、一生ものです。生徒も大人も。 □不登校に対して別室を設置し対策がなされている。また、個別指導なども十分行われている。	○肯定的評価は91.7%であった。校内委員会において、合理的な支援を検討し、テストにおいても解答の多様性を認めることができた。 ▽組織的なユニバーサル化を目指すことが課題である。	●校内委員会において、生徒一人一人に対する支援のあり方への検討を継続する。 ▼特別支援的な視点を通常教室にも導入できるよう、巡回指導教員や巡回心理士の助言を受ける。
不登校対策の充実	◇組織的に不登校に関わり、一人一人に合わせた指導を通して、生徒と保護者が将来に見通しをもてるように支援する。	○不登校対策委員会において、不登校生徒の情報を集めた指導を通して、生徒と保護者が将来に見通しをもてるように支援する。 ○不登校支援に関わる研修会の報告を随時行い、最新の知見や実践例を共有する。 ○生徒への関わり方を分析し、随時改善・更新し、組織全体に共有を行って実践する。	★不登校生徒(年間30日以上欠席)全員が、何らかの形で学校に関わり、生徒・保護者ともに将来への見通しをもてるようにする。 ★「大人になったら、自分は社会の役に立つ」という項目で「そう思う」と回答する生徒を35%以上にする。 ★不登校生徒全員が、何らかの学習に関わることができるようになる。	○不登校対策委員会で、一人一人の支援策を検討しながら、様々な研修会の報告を、校内研修の形で実施することができた。 ▽「そう思う」の回答は25.0%に向上したが、組織的に自己有用感を育てる取組が必要である。	●学校全体で、生徒にきちんと役割を与えて遂行させ、その過程や結果を丁寧にほめていくことを通して、キャリア教育を実践し、自己有用感を高めていく。 ▼不登校生徒が学習機会をつくれるよう、環境整備と一人一人に合ったやり方の検討を進めていく。	□学校は「あんしんルーム」の設置や設備の補充等生徒の気持ちを大事に考えている。 □不登校の原因を理解し共有する。そして先生全員で家庭と学校での方向を実践されているようにみられた。 □先生が迅速に対応している成果として、授業に出られないが学校には登校できる生徒が多数いる。	○不登校対策委員会で、一人一人の支援策を検討し、組織的に対応することができた。「大人になったら、自分は社会の役に立つ」については、35.3%に向上した。 ▽不登校生徒の学習への取組や評価について、検討していくこと。	●小規模校の強みを生かし、生徒に役割を与え、その過程を誉め、キャリア教育を実践することで自己有用感を高める。 ▼不登校生徒の学習機会を保障するため、引き続き環境整備を続ける。さまざまな学習のあり方や、評価の仕方を検討する。